

森林やまがた

No.153

2014.9



目 次

山形県県営林経営計画の概要について	2
森林経営計画制度の見直しについて	3
今年は山火事が激増!	4
「緑の雇用」制度の紹介と研修生の声	5
第38回全国育樹祭の準備状況	6
白鷹町森林・林業再生協議会の設置について	6
平成26年度第1回やまがた緑県民会議開催	7
みどりのページ	
平成26年度春の緑の募金実績	8
第23回緑の少年団全国大会に参加してきました	8
第7回山形県緑の少年団交流研修大会 (月山サマージャンボリー)が開催されました	9
「県民の森」森の案内人と 平成26年度「県民の森」森の案内人育成研修会	10
林道「三口線」の開通について	10
セントートピックス	
システム収穫表を用いた林分評価と将来予測	11
森の人紹介	
鈴木 文雄さん・鈴木 信夫さん	12
「やまがた緑の森プロジェクト」リポート3	13
有限会社庄司林業の先進的林業の取組について	14
最上総合支庁に木質チップボイラーを導入	15
真室川町森林整備計画検討委員会の開催	15
「最上地域森の感謝祭」	16
「第9回東日本チェンソーアート競技大会」を開催	16
山形県の古木・名木、公共木造施設	17
ワラビポット苗に関する各種研修会の開催	18

(表紙写真は、6月27日に林野庁の堀首席研究企画官を講師に開催された、森林・林業・林産業活性化推進研修会)

山形県県営林經營計画の概要について

◆県営林事業について

山形県県営林事業は、模範的林業経営を目的に明治四十三年から始まり、これまで森林の整備、立木等の売扱により、森林の公益的機能の維持増進及び林業の振興に貢献してきましたが、近年の木材価格の低下により県営林の収入は落ち込み、厳しい経営状況となっています。

一方で森林の多面的機能に対する社会的重要性は、ますます高まりを見せており、このような現状を踏まえ適正かつ合理的な森林施業の実施が求められています。

◆県営林經營方針について

県では平成二十六年三月に新たに平成二十六～三十五年度までの十箇年間の県営林經營計画を策定しました。

計画の基本方針としては、森林資源の充実、県土の保全及び公有財産の造成を目的とし、経営を効率的かつ適切に実施するため、経営の合理化を図ります。

伐期を迎えるまでの間伐については収入間伐を実施し、年間約五千七千m³の搬出を計画しております。

立木等の売扱については収入の基となるべき財産収入の伸びが期待できない状況が暫く続くと見込まれるため、今後も一般財源や公庫資金の活用は不可欠ですが、事業の実施にあたっては森林經營計画の認定面積を拡大し、国庫補助金を効率的に活用した収入間伐を積極的に実施し、中間収入の確保に努めていく方針です。

◆平成二十六年度の事業について

今年度は九箇所の県営林で国庫補助事業を活用した収入間伐を実施し、県収入として六百八十万円の売扱収入を見込んでおります。

◆県営林經營方針について

森林整備促進・林業等再生事業の加速化基金を活用した事業では、県全体で間伐面積六十六・七七ha、森林作業道開設五千九百五十mを計画しています。この事業で搬出された木材は、被災地に供給されることが原則となっており、復興に必要な木材の安定供給に役立てられます。

また、庄内の山五十川県営林では県営林經營改善モデル事業を実施しています。これは、県営林周辺の森所有者と共同で森林經營計画を作

県営林の樹種別資源表 (単位: ha、 m³)

区分	面積	蓄積
スギ	1,689.69	496,206
アカマツ	307.53	55,310
カラマツ	157.84	39,460
ヒノキ	16.76	2,698
その他針	21.41	3,792
天然林	952.72	98,994
伐跡・未立木地	171.58	
合計	3,317.53	696,460

収入間伐・作業道の計画

(単位: 箇所、 ha、 m³、 m)

地域名	県 営 林		収 入 間 伐 計 画						作業道開設計画		
			H26～H30		H31～H35		計		H26～H30	H31～H35	計
	箇所	面積	面積	材積	面積	材積	面積	材積			
村 山	22	1,142.12	75.39	3,535	88.12	3,540	163.51	7,075	4,500	1,000	5,500
最 上	6	583.78	28.94	2,856	74.88	7,195	103.82	10,051	850	0	850
置 賜	25	1,039.98	60.86	3,950	123.12	6,378	183.98	10,328	4,100	9,400	13,500
庄 内	19	551.65	290.70	18,035	117.78	8,174	408.48	26,209	33,716	13,650	47,366
計	72	3,317.53	455.89	28,376	403.90	25,287	859.79	53,663	43,166	24,050	67,216

〔県林業振興課〕

森林經營計画制度の見直しについて

（新しい「区域計画」の追加）

一 はじめに

森林經營計画制度は、平成二十三年（2011年）の森林法改正により、面的なまとまりのある森林を対象に施業集約化や効率的な路網整備を進め、持続的な森林經營を確保することを目的に新設されました。

平成二十四年度より各地域において計画の策定が進められてきましたが、地域によつては、零細な森林や不在村所有者が多く、合意形成が進まないなどの課題もありました。平成二十六年度から森林經營計画制度の見直しが行われました。

二 改正の内容

これまでの森林經營計画は、「属地計画」と「属人計画」の二種類があり、属地計画では林班の面積の二分の一以上を（「林班計画」という）、属人計画では所有森林が100ha以上という面積基準を満たす必要がありました。

今回の見直しにより、市町村が定める区域内で30ha以上を対象森林

市町村が定める区域とは、路網整備の状況やその他地域の実情からみて、森林施業や木材搬出を一体として効率的に行われる区域で、地形的要素や資源状況などから一體的な施業が見込めない森林（例えば海岸林や飛び地等の孤立森林など）を除きます。

三 留意事項

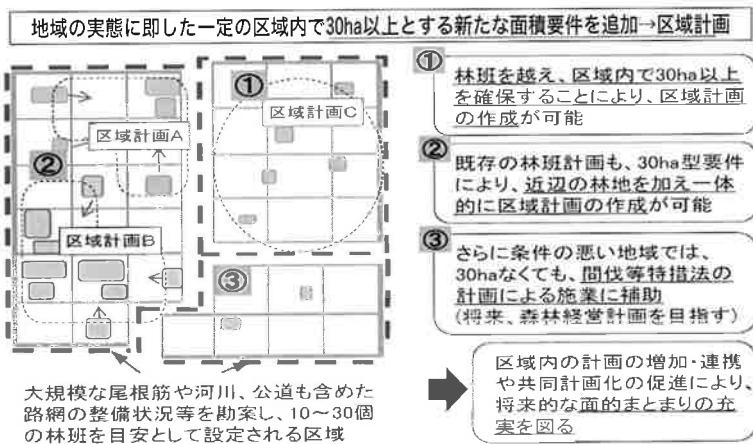
従来の林班計画と同様に、区域計画は単独でも共同でも作成でき、区域内で自ら所有または經營を受託する森林は全て計画対象森林に含める必要があります。

また、間伐、主伐等の施業実施基準については、これまでどおり基準に適合した施業が必要です。

- 計画種類別対象森林面積基準
 - ① 属人計画
自ら100ha以上の森林を所有
 - ② 属地計画・（林班計画）
林班または隣接する複数林班の二分の一以上
 - ③ 属地計画・（区域計画）
一体的整備区域内で30ha以上
- ※複数の区域をまたいでの計画
作成はできません

とすることで計画を作成できる新たな認定要件が追加されました。この要件に基づき作成された計画を「区域計画」と呼びます。

具体的な区域については、該当市町村林務担当課にご確認ください。



区域計画のイメージ

四 おわりに

県では、今回の見直しにより追加された「区域計画」を活用し、森林經營計画の作成を加速化していくことを考えています。

つきましては、今回改正された森林經營計画制度を適切に運用し、持続可能な森林經營に繋がるよう積極的な取組を進めていただきますようお願いいたします。

今年は山火事が激増！

平成二十六年山火事の発生状況（中間報告）

一 発生状況

県内で今年の前半六ヶ月間（積雪期間を除くと、実質は四月から六月までの三ヶ月間）に発生した林野火災は二十八件、被害面積は一九・七haとなっています。これは、前年度と比較して件数で一・八倍、被害面積で約十一倍、被害額は四百万円余りと激増しています。一件当たりの焼損面積は、最大五・四haと十haを超える大規模な火災はありませんでした。しかし、一haを超える比較的規模の大きい火災が、五件発生しています。

月別の発生件数をみると、四月が二十一件で昨年の四件から大きく増加しています。これは、昨年と比べ雪解けが早く、四月には林地の乾燥が進んだためと考えられます。

出火原因是「たき火の延焼」が十一件と半数を占め、次いで、火入れ、野焼きとなっており、山火事の多くは人為的原因により発生しています。

たき火は、林地に隣接する田畠や耕作放棄地などで、枝葉や枯れ草・ゴミなどを燃やしたもので、火の不

始末や、風で火の勢いが増し、林地に延焼したものが多くなっています。野焼き等の屋外の燃焼行為は禁止されており、林地に隣接する農家等の皆様への注意徹底が重要と思われます。

出火原因別集計

原因	件数 (件)	面積 (ha)	被害額 (千円)
たき火	14	2.783	686
火入れ	3	1.410	0
野焼き	2	5.402	1,891
不明	7	8.783	1,778
その他	2	1.316	0
計	28	19.694	4,355
平成25年	16	1.830	44
対比(倍)	1.8	10.8	99.0

平成26年1月～6月発生状況

二 貴重な資源を大切に

山形県では、八月から九月にかけ

ても、火入れなどで山火事の発生が多くなる時期となります。

山火事が発生すると、二酸化炭素の固定による地球温暖化防止機能をはじめ、自然環境の保全、木材の供給など森林の持つ多面的機能が一瞬にして失われることになり、これを

復元するには多くの年月と労力がかかります。



平成26年4月27日発生
山形市長谷堂地内

〔県林業振興課〕



秋募金期間 緑の募金 9月1日→10月31日

皆様からのご好意により寄せられた「緑の募金」は、皆様の自主的な「森林づくり・緑づくり」活動のために役立てていくこととしております。

主に、学校や公園で行う身近なところの緑化や、林業まつりなどのイベントの開催、里山での森づくり、川上・川下地域の交流による森づくりなどの森林整備に役立てられています。

ふるさとの緑の推進に、私たちは取り組んでいます。

公益財団法人 山形県みどり推進機構

〈事務局〉〒990-2363 山形市大字長谷堂字馬場2265 TEL(023)688-6633



「緑の雇用」制度の紹介と研修生の声

◆はじめに

山形県の林業就業者数は平成二十四年で千百五十三人であり、平成十四年の二千五百六十六人と比べ、十一年間で約五十五%減少しています。

依然として高齢者の占める割合が高く、新規就業者の育成・確保が急務となっています。

◆「緑の雇用」制度

「緑の雇用」制度は、新規就業者の確保・育成・キャリアアップを目的に、平成十五年度から開始された国の事業であり、森林組合などの林業事業体が新規就業者に研修を行う際、研修に必要な経費（研修生当たり月額九万円等）が事業体に助成される制度です。

「緑の雇用」で就業した新規就業者は、「緑の研修生」として、林業に必要な資格等の取得に加え、基本的な知識・技術等の習得のため、三年間の研修を実施し、林業作業士（フレストワーカー）を目指します。

◆本県の取組み

本県においても、制度が始まつた平成十五年から、これまでに百八十名が研修を受講しています。

また、職場を離れて、同じ立場の

今年度も「林業作業士（フォレストワーカー）」の研修生として

F W1（一年目）十三名
F W2（二年目）十五名
F W3（三年目）十四名

合計四十二名が技術の習得や林業に必要な資格の取得を目指しています。

四十二名の研修生のうち十代～二十代が二十二名。平均年齢は三十一歳となっており、林業就業者の増加と若年齢化に大きな成果を上げています。

◆集合研修の実施

林業作業士（フォレストワーカー）

の研修は、「山形県森林組合連合会」が実施する集合研修と森林組合などの林業事業体が日常の業務を通して行う職場内研修（OJT研修）があり、今年度の集合研修が七月にスタートしました。



チェーンソーのメンテナンス講習

集合研修について、研修生の声を聞いてみたところ、

「研修では職場で聞けないことを

軽く聞くことができる」「他の研修生の技術を見ると、励みになる」「同じメンバーで会えるのが楽しい」など

の感想が多く、「林業は難しいけど面白い」「出張や残業もなく、ストレスもない」「大好きな地元で働くことが嬉しい」など、「林業」という職業

に対する意見が多いのが印象的でした。

研修生同士が集まる機会でもあり、日常の業務を通じた情報交換やアドバイスなど、同じ立場で働く仲間との交流が図られるのも、この研修の大きな利点となっています。



「安全な伐倒作業」の実習

◆おわりに

本県の人工林は成熟期を迎えており、本格的に利用できる段階となっています。

森林資源の循環利用の推進に向けて人工林資源を積極的に活用しながら、健全な森林を育成していくためには、計画的な林業技術者の確保と育成が不可欠です。

研修生の皆さんには、今後もステップアップを図り、地域の林業を支える人材として活躍されることを期待します。

〔県林業振興課〕

第三十八回全国育樹祭の準備状況（第二報）

第三十八回全国育樹祭の開催まで二ヶ月を切りました。

前号では、緑の贈呈用苗木の育苗状況と飾花用木製プランターかばーの製作会の様子をお伝えしました。

今号では、苗木の引き継ぎの様子と、飾花の栽培状況をお伝えします。

◆苗木の育苗 in 富沢小学校

八月上旬、神室産業高校のミスト

温室では、生徒さんが夏休みに登校して、飾花である「ベゴニアセンパ」の世話をしています。

まだ草丈も低く、ちらほらと真っ白な花が咲き始めた頃で、これから鉢上げしてプランターへ植え替えを

くれていました。

さつそく学校の花壇の一角に植え込んで、水やりをしてもらいました。

よろしくお願ひします！



花壇への植え込みの様子



猛暑の中、温室での雑草除去作業

このときは少年団のみなさんの腰のあたりまでだつた苗木。十月の育樹祭では、大きく育った立派な苗木をお披露目しましようね。

〔県みどり自然課〕

（事務局一口メモ）飾花は会場を彩るほかに、立ち入り禁止区域の境界を明示するとても大切な役割があります。式典当日は飾花を跨いだりしないよう、みなさまご注意をお願いします。

町内の事業者やNPO法人、財産区議員等に委員を委嘱し、森林・林業の再生について議論・実践していくことになります。

白鷹町森林・林業再生協議会の設置について

平成二十五年七月十八日・二十二日・二十九日、白鷹町は今まで経験したことのないような大雨に襲われました。河川、道路、農業用施設を始め、山林も大変な被害を受け、町内

のあちこちで山腹崩壊、土砂崩れが多発し、河川には大量の土砂が流入し、被害を拡大させることとなつてしましました。

大量の雨、地質や地形が大きく関係しますが、崩壊している箇所を見ると、間伐が行われていない山林が目立つことから、崩壊の一要素として人工林の管理不足も考えられるかと思います。しかも白鷹町には山林のうち人工林が六割というデータがあり、改めて森林の荒廃と人工林の管理不足の実態を突きつけられる形となりました。

このような状況を受け、白鷹町の森林・林業の再生を図る必要性を痛感し、白鷹町森林・林業再生協議会を立ち上げる次第となりました。

〔白鷹町産業振興課〕



豪雨により崩壊した人工林

早速、今年度取り組むのが森林境界明確化事業です。白鷹町の山林の地籍調査進捗率はほぼ0%であり、

しかも細かく所有者が混在している状況です。条件はなかなか厳しいですが、間伐を行うために、まずは境界の明確化から一歩踏み出して、少しづつかもしれませんが、白鷹町の森林・林業の再生を目指して活動を広げていきたいと思っています。



みどりのページ

平成二十六年度 春の緑の募金実績

平成二十六年度春の募金実績は次のとおりです。

◆募金期間

平成二十六年四月一日から
五月三十一日まで

◆募金の種別

家庭募金・街頭募金・職場募金・
学校募金・企業募金・その他

◆募金の実績額

千七百四十五万三千円

◆募金の状況

「緑の募金」でふせごう地球温暖化」のスローガンのもと、様々な取組みを積極的に展開してきました。これからも、より一層県民のみなさまのご理解を得られるよう努めて参ります。

◆今後の緑の募金活動

秋の緑の募金期間は、九月一日から十月三十一日までとなつており、山形県みどり推進機構では緑の募金の普及啓発に努め、募金の効果を最大限發揮できるよう取り組んで参りますので、今後とも、みなさなからのご協力をよろしくお願い申し上げます。

「緑の募金」にご協力いただいた企業・団体のみなさま (H26. 6. 1~7. 31)

(山形県みどり推進機構取扱い分)

(株)アーレスティ山形、(株)アライドテック、(株)柿崎工務所、(株)幸輪、(株)斎藤建設、蔵王食品(株)、(株)佐藤工務、白鷹ロータリークラブ、大仲建設(株)、(株)タカハシ電工、(株)高良山形営業所、田村技研工業(株)、東北電力(株)山形支店、(株)トプコン山形、(株)ナルセ、(株)畠山、水澤化学工業(株)水沢工場、やまがた育児サークルランド、山形イブニングロータリークラブ、(株)山形環境エンジニアリング、山形県観光物産協会、山形県看護協会、山形県企業振興公社、山形健康管理センター、やまがた健康推進機構、山形県国民健康保険団体連合会、山形県農業共済組合連合会、山形県埋蔵文化財センター、(株)山形メタル、(株)ヤマトテック

(以上、敬称略・五十音順)

ご協力ありがとうございました。



記念式典で入場行進する東郷小みどりの少年団員

第一十三回緑の少年団全国大会に参加してきました

◆期日 平成二十六年七月二十三日
～七月二十五日(二泊三日)

◆会場 岐阜県揖斐川町、美濃市

◆参加状況

第二十三回緑の少年団全国大会が岐阜県を会場に開催され、本県からは東郷小みどりの少年団(東根市)の六年生団員二名が参加しました。

この大会は、三十六都道府県から五十六団、合計約三百名の団員が参加し、平成二十七年に岐阜県で開催される第三十九回全国育樹祭に向けた機運醸成を図ることを目的に三年ぶりに開催されたものです。



大人気のツリークライミング

閉会式では、班ごとに活動内容について発表した後、三日間の活動の様子をまとめた映像が放映されました。自分たちの班が映る度に歓声が上がり、三日間の活動を振り返って

記念式典の終了後、八班に分かれ、班ごとに自然体験や伝統文化などの体験活動を通して交流を図りました。東郷小みどりの少年団の団員は、七道府県の四十六名と共に間伐材を使つた時計づくりやツリークライミング、草木染の体験を行いました。中でもロープを使って十メートル以上の大木に登るツリークライミングは大好評で、歓声を上げながら普段は見ることのできない視線からの眺めを楽しんでいました。



みどりのページ

張平公園と山形県立自然博物園の周辺を会場に盛大に開催されました。

今年の山形県縁の少年団交流研修大会（月山サマーディアンボリー）は、第三十八回全国育樹祭の開催記念行事として、県内の十九の少年団から百九十一の団員が参加し、月山の

◆実施状況

山形県緑の少年団交流研修大会実行委員会（山形県緑の少年団連盟、山形県、第三十八回全国育樹祭山形県実行委員会、西川町、村山地域林業振興協議会、山形県みどり推進機

◆

◆期日 平成二十六年八月六日
◆会場 西川町弓張平公園

**第七回山形県緑の少年団交流研修大会
(月山サマーディランボリー)
が開催されました**

一緒に過ごした仲間との別れを惜しんでいました。



運動祭実大会の様子

自然散策は、県立自然博物園と地蔵沼の二つのコースに分かれて行われ、「森のたんけん手帳」（一五二号参考照）を使って、森の中には緑色だけではなくいろんな色があること、葉っぱを擦るといい香りがする植物があることを学びました。

プランターカバーは、十月に金山町で行われる全国育樹祭の会場に飾られるもので、二人一組になつて協力しあいながら完成させることができました。この活動によつて、参加した団員ひとりひとりが全国育樹祭の開催に関わっているという意識を持つてもらうことができたと思います。

また、とつても冷たく澄んだ月山の湧水が湧き出ているところに到着すると、「冷た〜い!」「おいしい!」などと歓声を上げながら自然の恵みをいただきました。どちらのコースにもブナの原生林が広がっており、五感をフルに使つて月山の大自然に触ることができました。

当日の天気予報では降水確率が高い雨も心配されましたが、子供たちのあまりの元気の良さに雨雲はどこかに吹っ飛んで行き、青空の下で活動を行うことができました。



参加者全員での記念撮影

最後になりましたが、大会の運営に際しご協力いただいた関係者の皆様に対し、厚くお礼申し上げます。

「県民の森」森の案内人と

平成二十六年度「県民の森」森の案内人育成研修会

◆「県民の森」森の案内人の現状

山形県森の案内人は、平成十一年度から登録が始まり、「県民の森」では、これまで八十五人が登録し活動してきましたが、平成二十六年四月一日時点で、退会、休会されている方を除き活動中の方は、三十九人で、かつ高齢化しております。「県民の森」の安定した運営を行うには五十人程度の案内人が必要と考えております。

森の案内人になるためには、申請書を提出していただき、県審査を経て登録されます。研修修了は登録条件ではありませんが、登録のきっかけづくりや案内人の活動スキルを身につける目的もあり、研修会を実施しております。

◆研修会（五月三十一日、六月一日）

両日とも、梅雨入り前の気温三十度を超える天候でした。「県民の森」は、標高五百七十mに位置し市街地より涼しいとスタッフは我慢していましたが、参加者は暑がる素振りも見せず、楽しく、生き生きとされていたのが印象的でした。研修は、「県

民の森」の基礎を学んだり、講師から案内人として活動する際の見本を見せてもらうなどの内容です。

参加申込者は、二十代から七十年代の男女十三人、当日の欠席者も出ましたが、新たに六名を案内人に登録することができ、七月にはオリジナル帽子、ベスト及びバッジも準備しました。また、地方局TUYの「えこいろ」から密着取材を受け、広く発信もできました。



◆はじめに

林道『二口線』は、山形市山寺と仙台市太白区秋保町を結ぶ全長約十九キロメートルの県境を越える名所旧跡が多い、眺望豊かな道路です。

①見通しの悪い急カーブや急勾配箇所、道路幅が狭小な所は、徐行運転の徹底をお願いします。
②設計速度は時速二十キロです。特に、山形県側は全線舗装されおりスピードが出やすい環境です。

◆今年度の開通状況

本県側は、八月十三日から十一月初旬まで、県境までの区間を開通させる計画です。通行時間帯は九時から十七時ですが、路面凍結など通行上の危険が認められる場合は閉門する予定です。

一方で、舗装路面の劣化が著しい箇所などの修繕工事を九月初旬から行いますので、工事期間中は、一時的な全面通行止め措置などを伴う場合があります。

なお、宮城県側では、法面改良や舗装工事が九月末日まで行われることから、全線供用開始は十月初旬となる見込みです。

◆おわりに

『二口線』は山形県と宮城県の県境を跨ぐ重要な横軸道路です。村山総合支庁では、安全通行を最優先に、宮城県と連携しながら『二口線』の通行管理に努めてまいりたいと考えておりますので御協力をお願いします。

『二口線』はあくまでも林業用施設です。通行される方は、次のことを十分留意してください。

林道「二口線」の開通について （十月初旬に全線開通予定）

システム収穫表を用いた 林分評価と将来予測

◆はじめに

林業は植栽から伐採まで長期を要するため、林業経営を行うにあたっては、様々な条件を考慮した長期計画が必要となります。さらに、最近では、林業の集約化を進めるにあたって、集約化のメリットや林分の将来像を、より具体的に示すことが求められています。

こうした中、林分の将来予測を行う新たなツールとして『システム収穫表』の開発が進んでいます。

◆従来のスギ林分成長予測

山形県では、林分の成長を予測する際に『山形県スギ林分収穫予想表(昭五十五)』などを用いてきました。

これは、地域毎(内陸地域と庄内地域、多・豪雪地帯と少雪地帯)について標準的な施業を行った場合の林分因子(平均樹高、平均胸高直径、本数密度、幹材積など)を地位、植栽密度、林齢毎に対応させて表したもので、ここで言う標準的な施業とは、下層間伐を繰り返し行い、良質材生産を目的としたものです。しかし、現状のスギ林では、間伐が遅

れているなど、すでに収穫表と大きく乖離している林分が多く、また、昨今では下層間伐以外に、上層間伐や列状間伐などが取り入れられるようになってきました。このように多様な林分で多様な施業が行われるようになつたため、従来の収穫予想表を十分に活用できない状況になりつつあります。

◆システム収穫表

システム収穫表は、実際の林分データを初期値として、その林分が成長する様子をシミュレートするプログラムです。成長の過程において間伐方法や間伐時期を変えることで、林分の将来像も変化します。様々な間伐を試してみて、いつ・どのような間伐を行えばよいか、また、主伐をいつにすればよいかなど、計画を立てるときの意思決定を支援してくれます。

◆システム収穫表「LYCS」

現在、システム収穫表はいくつか開発されていますが、ここでは「LYCS」について説明します。

「LYCS」は白石則彦(東京大

学)によって開発されました。その後、森林総合研究所が中心となり改善開発を進めExcel上で簡単に操作をすることが可能になりました。

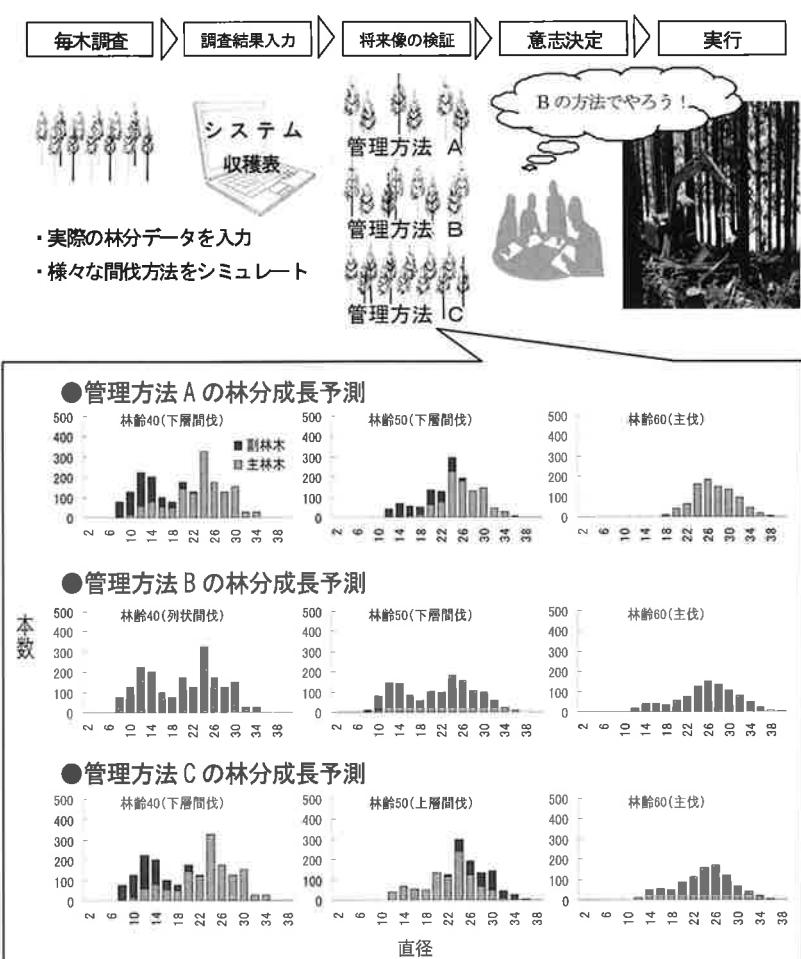
「LYCS」では次のような操作が可能です。

- ①現実の林分のデータを初期値として、その後の収穫を予測できる。
- ②間伐林齢、間伐回数、間伐強度、間伐方法を自由に設定できる。
- ③平均直径だけでなく直径階分布を

④市場材価、採材パターンに応じた木材価格が推定できる。

◆センターの取り組み

森林研究研修センターでは、システム収穫表の精度の向上を図り、また、汎用性を高めるために、基礎データの収集を行っています。さらに今後、伐採・再造林などのコスト計算を踏まえたシステム作りを進めていきます。(森林研究研修センター)



森の人紹介

豊かな森林は苗木づくりから

尾花沢市 鈴木 文雄さん



「周辺の山は、すべて自分で育ったと話してくれました。また、昔は良質な種を探して探ることにとても苦労しましたが、現在は県の森林研究研修センターから優良種子が配布されるようになっており、大変ありがたいとのことです。

鈴木さんは、員は四名まで減り、後継者もいない大変厳しい状況ではあります。「山づくりに種苗はなくてはならない」、「種苗の技術を伝承していくことが必要」との強い想いを語る鈴木さん。

尾花沢市正厳にお住まいの苗木生産者で、なんと明治時代から続く鈴木苗畑の四代目だそうです。お父さん（故人）さんは、山林種苗等生産事業功労者の最高峰である林野庁長官を受賞された県内苗木生産のリーダーでいらっしゃいました。

文雄さんが就業した昭和四十年代前半は拡大造林の最盛期でスギ苗木の需要もピークだったことから、当時は四ヘクタールの苗畑で毎年約二十万本を出荷していたそうです。

現在は、生産量は減りましたが、三ヘクタールの苗畑で毎年三十五万本を出荷し、官行造林（国有林）や水源林（旧公団）造林で植栽されているとのことです。



〔村山総合支庁森林整備課〕

苗木づくりでは、根がしつかりと張るために柔らかい土づくりと肥料が特に重要で、人手での雑草取りや根切り虫の退治も大変ですが不可欠のことです。それでも、根切り機や床替機など重労働だった作業の機械が開発されたことが大きな進歩だ

や床替機など重労働だった作業の機械が開発されたことが大きな進歩だ

地元の良さを発信する
有限会社 木ら木ら星
代表取締役 鈴木 信夫さん



鈴木さん
(新庄市)

は、「木」を

一つのテー

マに最上地

域の自然を

活かした商

品作りを行

っています。

昨年からは新技術であるコンテナ苗（ポット苗）栽培にもチャレンジを始める

平成五年に二十七年間勤務した企業を退職し、現在の有限会社木ら木ら星を開業しました。企業に勤務していた頃は、全国各地を訪れる機会が多くたたそうです。「他県を訪れるたびに、あたりまえのことで気づくことが出来ない地元の魅力を実感することが出来る。最上地域の魅力は四季を通じて自然豊かなところだと思います」と言います。開業当初は、苦しい時期もありました。しかし、続けていくうちに、繋がりも増え、自分の世界も出来上がってきたそうです。そんな鈴木さんの商品は木で作



〔最上総合支庁森林整備課〕

つた「はが木」、自由研究等の教材などオリジナリティにあふれています。また、新庄駅に隣接された最上広域交流センター「ゆめりあ」内には、日本で初めて木工クラフト等の体験が出来るコーナーを常設しました。

鈴木さんは、最上地域でものづくりに携わっている方で構成された「もがみ手業のものづくり協議会」の会長も務めています。協議会では、作品展示会やイベントへの参加を積極的に行ってます。最上地域でものづくりを行う人たちの支えになる協議会に成長していくべと話します。

「失敗する不安があつても決心して行えば何でも出来る」と語る鈴木さん。今後も最上の自然を活かした商品開発への挑戦に期待します。

「やまがた絆の森プロジェクト」

㈱ウンノハウス・楽天(株)

リポート3

◆はじめに

県では、県民や企業の皆様に森づくりや自然環境の保全活動に取り組んでいただきため、「やまがた絆の森プロジェクト」を活用し、「やまがた絆の森づくり」を推進しております。現在、県内二十四箇所で企業による森づくり活動が行なわれています。

今回は、㈱ウンノハウスと楽天(株)の取組みをご紹介します。



◆ウンノハウス企業の森

(株)ウンノハウスでは、地球温暖化の防止、土砂災害の防止、水源かん養など、暮らしや環境を守る森林の役割と重要性について関心が高まっていることを背景に、住宅用木材を使用する企業として、消費した森林資源を再生するための「森づくり」を進めています。

山形県源流の森（飯豊町）を活動



スキ植栽活動の状況

本県では、やまがた絆の森協定を締結し、鳥海山麓にある酒田市升田の（公財）山形県林業公社のスギ造林地において、イヌワシの生息環境の向上のための十二ヘクタールの間伐と二百メートルの作業道開設を計画しています。また、森林整備による植生の変化やイヌワシの採餌場としての機能を確認するため、効果調査を行うこととし、協定には調査機関として国立大学法人山形大学からも

◆おわりに

県では、今後とも、森づくり活動を通して企業と地域の交流が深まり、地域の活性化に繋がるよう「やまがた絆の森」を推進してまいります。

〔県みどり自然課〕

今年六月には、二期目となる平成三十年度までの五年間の協定を締結し、今後とも森づくり活動に積極的に取り組んでいくこととしています。

◆楽天の森

楽天(株)（本社・東京都）は、東北楽天ゴールデンイーグルスのマスコット「クラッチ」のモデルであるイヌワシが生息する森林の再生を目的に全国で森林整備に取り組むこととし、本県を含む東北六県で活動を開始します。



山形大学による効果調査の事例

地として、平成二十一年度にスギを植樹し、翌年度から下刈りや雪起こしを続けてきました。また、毎年秋の森づくり活動終了後には、地元の食材を使った芋煮会を催し、県内外から集まつた社員と地域との交流を深めきました。豊かな森林生態系の保全に向けて森林整備を進めるとともに、取組みを広くPRするため、楽天(株)のホームページで整備や調査の状況を随時公表していきます。

有限会社庄司林業の先進的林業の取組について

ウッジョブ事業体が最新鋭の機械導入で森林ノミクスを加速化

◆はじめに

木材価格の低迷により、林家の所得の減少及び林業従事者の働く意識が減退している中、生産性の向上、省力化、労働強度の軽減及び労働安全性の改善を図るため、県内においても高性能林業機械が導入されております。

このようなか、大江町、西川町内の国有林及び民有林の素材生産をして、事業を開拓している(有)庄司林業において、生産性の向上及び品質の向上を図ることを目的に「大型ハーベスター」を導入しました。

◆導入に至った経緯

現在、伐期を超えた大径木が多くなって来ており、これまで所有するハーベスターでは、直徑四十cm以上の木の伐採・造材(枝払い、玉切り)が出来ず、また、落葉の太枝についても、パワー不足により対応出来ない状況にありました。

このため、ハーベスターで対応出来ない部分については、チェーンソーに頼らざるを得ないため、作業効率

の低下、さらには、労働強度の増加、労働安全性の低下等の要因にも繋がっていました。

このようなことから、(有)庄司林業では大径木にも対応できる機種として、平成二十五年度に林業・木材産業改善資金を活用して、ハーベスター一台を導入しました。

◆導入機械の概要

・ベースマシーン

日立 ZX225USR-13

・ヘッド

LOGSET

ハーベスター ヘッド TH六五
(フィンランンド製)

◆導入機械の特徴

最大直徑六十五cmまでの伐採・造

材することが可能となりました。

また、ベースマシーンが高出力(九十一馬力→百六十六馬力)となり、

パワー不足を感じることなく、太枝の大部の処理が可能となりました。

た。

なお、ハーベスター ヘッドは、フィンランード製ですが、特別に油圧配管等が日本仕様に変更されています。



大径木対応ハーベスター



国有林作業現場での機械の稼動状況

となく続けられ仕事量の確保、作業の低コスト化が図られました。

◆導入による効果

間伐作業では素材の生産性がこれまで一日あたり四十～五十m³でしたが、七十～八十m³と一・五倍程度に増加しました。

造材作業については、この機種では三割程度の出力で従来と同じ仕事量をこなすことが可能となりました。

た。

また、作業システムにおいては、ハーベスターが追加導入されたため、二台体制での稼働が可能となり、生産性の向上はもちろんですが、一台

が故障・修理となつてもハーベスターによる伐採・造材作業を停止することはありません。

◆おわりに

機械導入間もない時期は、効率的な運転操作等に慣れるまで時間がかかりましたが、これまで大きなトラブルもなく順調に作業が進められました。

今後、皆伐が本格化してくれば、この機械の能力が最大限に發揮できる作業システムも確立され、高効率の作業システムが定着するものと期待されます。

最上総合支庁に木質チップボイラーや導入

◆はじめに

最上総合支庁では、地域の豊富な森林資源を有効活用し、木質バイオマスのさらなる利用拡大及び「木質バイオマスなら山形県最上地域」の確立を目指して取組みを進めております。このようなか、この度県有施設で初めて当総合支庁舎に木質チップボイラーガ導入され、平成二十六年七月一日に火入れ式が行われました。

◆再生可能エネルギーの普及

木を利用した燃料（エネルギー）の特長は、燃焼時に二酸化炭素を発生するものの、木が生長する時に二酸化炭素を吸収するため、差引ゼロとなり、化石燃料と比較して、環境にやさしいと言えることです。

最上総合支庁では、地域エネルギーの地産地消の推進を重点施策として取組むなか、県自らが率先導入することで市町村の公共施設や民間製造業・事業所等への導入促進に繋がるものと期待しています。



◆施設概要

既存施設は、昭和六十一年度設置の重油焚きボイラーより、冷房・暖房を賄つておりました。今回その機能を木質チップボイラーより更新（新G

N D基金を活用）するものです。本体は、スイス製（シユミット社）で最大出力九百キロワット、燃料となる木質チップは、地元産で年間約千二百m³の消費を見込んでおります。

検討委員は、山形森林管理署最上支署長、最上広域森林組合長、最上総合支庁森林整備課長、真室川町産業課長、森林所有者代表、林業従事者、素材生産業者、木材製材業者、県みどり環境交付金公募事業実践団体代表者の計十名で構成されています。また、アドバイザーとして最上総合支庁森林整備課の準フオレスターが参加しております。

真室川町森林整備計画検討委員会は、平成二十七年度に樹立する真室川町森林整備計画の内容を検討する組織として、平成二十六年六月六日に第一回が開催されました。

検討委員は、山形森林管理署最上支署長、最上広域森林組合長、最上総合支庁森林整備課長、真室川町産業課長、森林所有者代表、林業従事者、素材生産業者、木材製材業者、県みどり環境交付金公募事業実践団体代表者の計十名で構成されていま

す。また、アドバイザーとして最上総合支庁森林整備課の準フオレスターが参加しております。

真室川町森林整備計画検討委員会の開催

第一回は、真室川町長から検討委員に委嘱状が交付され、委員長には、



真室川町長より委嘱の交付を受ける



検討委員会の様子

最上地域においては今後益々木質バイオマスエネルギー分野への利用拡大が見込まれるため、現在「最上地域木質バイオマスエネルギー利用検討会」や「木質バイオマス燃料の安定供給体制協議会」を開催し、利便性を図るアドバイス等を展開して参ります。〔最上総合支庁森林整備課〕

最上広域森林組合長が選出されました。

次に、最上総合支庁森林整備課長

より、最上地域の森林・林業の現状

と課題について、人工林の蓄積の状況や最上地域の森林・林業・木材産業振興ビジョンの説明がありました。

「最上地域森の感謝祭」

最上地域の豊かな自然の恩恵に感謝し金山町で開催される第三十八回全国育樹祭に向け気運を盛り上げるために、平成二十六年度「最上地域森の感謝祭」～次世代を担う子どもたちとみんなで森林づくり～が、七月十二日、十三日の両日、約五百三十名の参加を得て、新庄市で開催されました。

十二日は、「最上地域の豊かな森林と巨木の癒しについて考える」をテーマに、「第三十八回全国育樹祭記念震災復興支援森づくり交流シンポジウム」が行われ、パネルディスカッションにより議論を深めました。

十三日は、新庄市立日新小学校合唱団によるオープニングコーラスの後、約四百五十名の参加者で式典が開催されました。式典では、来賓祝辞、緑の少年団への森づくりリレー旗の交付の後、全国育樹祭の成功祈願の意味も込めて参加者全員で「森づくりがんばろう宣言」を行いました。また、式典終了後は高性能林業機械やエンソーアートの実演、ペン立てやプランターかばーの作製、ペ

森林○×クイズなどを行いました。○×クイズの賞品は、カブトムシ百匹。上位十名にはケース付きでプレゼントされるとあって、答えが発表されたたびに、歓声が上がっていました。

森林○×クイズなどを行いました。○×クイズの賞品は、カブトムシ百匹。上位十名にはケース付きでプレゼントされるとあって、答えが発表されたたびに、歓声が上がっていました。



〔最上総合支庁 森林整備課〕

「第九回東日本エンソーアート競技大会」を開催

七月二十七日に、山形県金山町のグリーンバレー神室と遊学の森において、第九回東日本エンソーアート競技大会が開催されました。

大会には、遠くは愛知県から、腕自慢のエンソーカーバー（エンソーディレクターで彫刻をする人）十四名が集結し、雨交じりの悪天候の中、壮絶なバトルを繰り広げました。

本大会は、スギの伐根部分などこれまで利用されていなかつた木材を活用して新たな価値と魅力を創り出し、山村地域の活性化や自然環境の保全を推進することを目標として、毎年金山町で開催されています。

テーマは、「生活に活用できる作品」

第九回大会は、「間伐材等を用いた実際の生活に活用できる作品」を大きなテーマとしました。

今回の大会では、県内から参加したカーバーが七名とカーバーの半数に及び、県内出身者がメインカービングの三～五位、ベストビギナー賞、ペープルズチョイス優勝に輝きました。

激しかったバトルカービング！

三十分でその腕を競い合う「バトルカービング競技」も行われました。決勝に勝ち残ったのは五人。決勝の作品テーマは、会場からのリクエストでカメ、ペンギン、パンダ、ドラゴン、ウマ。カーバー達は大弱り。

しかし、そこは各地の競技会を勝ち抜いてきた猛者達だけに、一度チエンソーを握ってしまえば、豪快なエンジン音を響かせて、動物の形や毛並み等の細やかな部分に至るまで表現し、その様子を見ていた観客は、徐々に出来上がって行く作品を驚きの表情で見つめていました。

〔最上総合支庁 森林整備課〕



バトルカービング優勝作品「ウマ」
栗田 宏武(千葉県)

山形県の古木・名木⑫

勝地の大杉

鶴岡市板井川字勝地

かつて櫛引地域の山林一帯に天然スギが生育していましたが、

ほとんどが伐採されました。水無川は昔から、庄内南部地域の水源として重要な河川ですが、増水期以外は伏流水となり、表流水の無い水無川への土砂流出防止と水源保護のため明治以降に流域一帯は水源かん養保安林等の制限林に指定されました。水無川を並走する林道沿いに天然スギの名残といわれるホウキ状の一本の大杉があり、昭和五十七年三月五日に市の天然記念物に指定されました。目通り周八・一m、樹高二十四・五m、樹齢は約四百年と推定されます。



〔山形県森林協会〕



(案内略図)

正面



完成年度 平成24年度

延床面積 188m²

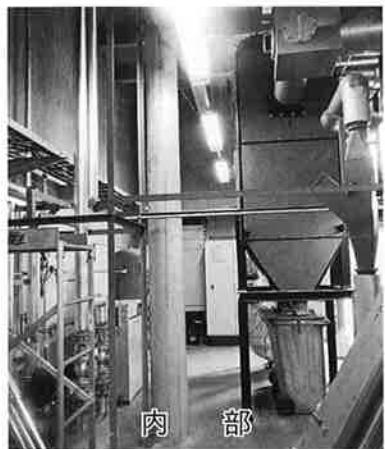
構 造 R'C・木造平屋建て

特 徴 外観に金山住宅の切妻屋根を採用し、梁や壁に金山杉等の木材を使用することにより、隣接するホテル等と違和感の無い景観になるよう配慮をしています。防災拠点としての機能を有し蓄電池も配置しています。

木質バイオマスボイラは、主に温泉の加温や床暖房に利用され、年間2,600m³のチップやバークを使用する計画です。

公共木造施設⑧

木質バイオマスボイラ棟 最上郡金山町大字有屋



内 部

「車両系木材伐出機械の運転業務に係る特別教育講習」を実施します!

◇平成26年10月23日(木)、24日(金)の2日間 9:00~17:00 会場:山形県土地改良会館

◇平成26年11月12日(水)、13日(木)の2日間 9:00~17:00 会場:ヒルズサンピア山形

労働安全衛生規則の一部が改正され、「伐木等機械(ハーベスター、プロセッサ、木材グラップル等)」「走行集材機械(フォワーダ、スキッダ、集材車等)」「簡易架線集材装置等(スイングヤーダ、集材ワインチ等)」の各運転業務に係る特別教育が新たに設けられました。平成26年12月1日以降それぞれの業務に就くには、平成26年11月30までに当該特別教育を受講することが必要です。

お問い合わせは

林業・木材製造業労働災害防止協会山形県支部
TEL:023-666-4810 FAX:023-666-4811

ワラビポット苗に関する各種研修会の開催

◆研修会の目的

林地の有効活用、森林所有者の収入安定化等の観点から、専用林産物の生産振興が求められています。

専用林産物のワラビについては、森林研究研修センター、最上産地研究室により、ポット苗を利用した早期成園化の技術が開発されました。

このためワラビポット苗の技術を広く普及していくことが重要です。

◆三瀬自治会による取り組み

鶴岡市八森山スキー場は、市の行財政改革の一環で、平成二十五年度で市から三瀬自治会へ運営を引き継ぐこととなりました。三瀬自治会では、冬のスキー以外に夏場のスキー場の有効活用を検討しておりました。

そこで、八森山スキー場で試験的にワラビのポット苗を栽培してみると、ワラビ園の可能性を探ることになりました。あわせて、庄内地域に広く技術を普及していくため、研修会を開催することとしました。

◆研修会の内容

(一) ワラビポット苗研修（初回）

【二十五年九月二十九日 十三名参加】

(四) ポット苗栽培実習

【二十六年六月二十二日 四十二名参加】



最初に、三瀬自治会にワラビポット苗の栽培技術の概要を、ポット苗の実物を見せながら説明しました。

また、既存のポット苗から育苗バットに移し、ワラビポット苗の親株をつくる実習を行いました。

(二) 維持管理研修

【二十五年十一月九日 二十名参加】

九月開催研修時に疑問があつた事項について、技術開発者の森林研究研修センターから説明を受けました。また、小国町のワラビ園の事例について講演を行いました。

(三) ポット苗づくり研修

【二十六年三月九日 三十名参加】

九月に育てた親株から、種根を取り出し、ポット苗をつくる実習を行いました。具体的には、親株の土を軽く水で洗い流し、白い成長点をついた種根を長さ五センチ程度に切り、ボリポットに鉢上げをしました。また、西川町におけるワラビの成園事例について講演を行いました。

三月につくったポット苗を、実際にスキー場わきに設けた試験地に植栽しました。また、スキー場以外に、三瀬地区内の耕作放棄地約二百五十m²でも試験的に植栽を行いました。

◆今後に向けて

一連の研修会は終了しましたが、植栽したワラビが実際に成園化するかどうかはこれからです。また、ワラビポット苗の技術を知らない方もまだまだおります。

今後も、庄内総合支庁は、三瀬自治会と協力しながら、ワラビの成園化の検証とあわせて研修会を行い、ワラビポット苗の技術を広めていきたいと思います。

〔庄内総合支庁 森林整備課〕



緑のアドバイザー

一般財団法人 日本森林林業振興会

秋田支部 山形出張所長 早坂 隆雄
秋田支部 支部長 伊藤 広一
TEL 090-0045 山形市松栄1-5-41
TEL 023(647)8450 FAX 023(674)0109
TEL 010-0001 秋田市中通5-9-49
TEL 018(832)4040 FAX 018(835)6837